

# 高井田山古墳

1992. 3

柏原市教育委員会

## はしがき

柏原市では、現在高井田横穴群の史跡公園整備事業を進めており、平成4年度には開園する運びとなりました。この事業を進めるにあたり、公園内にあたるいくつかの古墳について、保存・公開をはかるために発掘調査を実施いたしました。

本書で報告する高井田山古墳もそうした古墳の一つです。史跡高井田横穴群中で唯一墳丘をもつ古墳であること、古式の横穴式石室を内部主体とすること、熨斗・銅鏡・甲冑などの珍しく、豊富な副葬品が出土したことなどで大変注目されるものです。

この高井田山古墳を始めとする貴重な文化財を生かし、自然の中で古代史に触れ、親しんでいただくことのできる史跡公園をめざし、今後とも努力してまいりたいと思います。多くの方々の御来園、ご利用をお待ちいたしております。

最後になりましたが、調査を御指導いただいた文化庁、大阪府教育委員会をはじめとする関係諸機関、諸先生、また発掘調査に深い御理解、御協力をいただいた地元住民の方々に篤くお礼申し上げます。

平成4年3月

柏原市教育委員会

教育長 勉刀和秀

## 例　　言

1. 本書は、史跡高井田横穴公園整備事業に伴い実施した高井田山古墳（旧高井田2—56号墳）の調査概要報告である。
1. 調査は文化庁、大阪府教育委員会の指導に基づき柏原市教育委員会が実施し、社会教育課安村俊史、桑野一幸が担当した。
1. 調査は平成2年11月16日～平成3年4月26日の期間行った。

1. 本書の編集・執筆は安村、桑野が行った。
1. 本書で使用した方位は磁北、標高はT.P.である。
1. 調査では堅田直、田中琢、水野正好、勝部明生、角山幸洋、井藤徹、西山要一、奥田尚、今津節生の諸氏をはじめとして多くの方々に御指導、御協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

## 1. 調査に至る経過と整備計画

柏原市では、平成元年度より3年計画で、高井田横穴群の史跡公園整備事業を実施することになり、整備対象地約35,000m<sup>2</sup>を東西に分割し、平成元年度は全体の基本設計と東半の実施設計、平成2年度は東半の発掘調査、および整備事業と西半の実施設計、平成3年度は西半の発掘調査、および整備事業を実施することになった。また、それまでは約1,400m<sup>2</sup>にすぎなかった史跡指定地が、平成2年3月に整備対象全域に拡張、追加指定されることになり、文字どおりの史跡公園として、その後の整備事業が行なわれてきた。

高井田山古墳は、東半の北東部に位置し、大阪府教育委員会の分布調査では第2支群56号墳・円墳とされている。位置は、南へのびる丘陵の南端尾根上に当たり、調査前は確かに円墳状の地形を呈しているものの、石材もみられず、古墳か否かも確認できなかった。

そこで、実施設計では、発掘調査を実施した後、古墳であることが確認されれば、円墳広場として芝生張りの広場に整備することにし、文化庁の了解を得た。

この計画に基づいて、平成2年11月より、トレンチ調査を実施したところ、古式の横穴式石室を主体部とすることが判明し、石室内の転落石を除去すると、甲冑らしき鉄製品が検出された。そのため、至急に大阪府教育委員会に連絡をとり、文化庁の指導のもとに、石室床面まで発掘調査を実施することにした。

これに伴って、平成2年度中に整備予定であった当古墳の整備を平成3年度に延期することにし、調査と平行に、整備のための実施設計を進めた。その結果、類例の少ない横穴式石室であるため、マルチシャルターで石室を覆い、見学できるようにし、墳丘には最小限の見学路と説明板を設置し、他は芝生張りとする。また、石室内には出土遺物のレプリカを展示して、整備を進めることにした。



△高井田横穴群全体図（太線内は史跡指定地）



△石室に落ち込んだ天井石



△半壊した天井石を取り除く



△鏡、熨斗周辺の床面の剥ぎ取り



## 2. 調査の経過

平成2年11月16日、器材を搬入、トレッセを設定し調査を開始した。丘陵頂部にあたるI区では多量の石材が検出され、中央部の石材を除去しながら全体の形の確認を急ぐ。11月21日、板石を積み上げた右片袖式の横穴式石室が確認されるとともに、奥壁に沿って鉄製品（短甲、脣の一部）が並んでいることも明らかになった。墳丘の測量結果や以上の発掘調査の結果をもとに、今後の調査方針を検討するために12月6日から調査を中断した。翌平成3年1月16日、文化庁田中哲雄氏の視察、指導を受け、玄室に限定して調査を継続することになった。

1月23、24日、銅鏡、熨斗を検出。実測、写真撮影終了後、遺物の劣化、盗難等に備えるため周辺の精査前に取り上げを行った。その後甲冑、刀剣・鎌などの鉄製品、玉類、須恵器などを精査するとともに、2月18日、疎敷きの玄室床面のうち鏡、熨斗の出土した部分の「剥ぎ取り」を行った。3月7日、石室の実測を開始。ほぼ実測の終了した4月6日、現地説明会を行う（雨、参加者約500人）。その後墓域、盗掘跡などの細部を調査。盗掘によって崩れていた西壁中央部は玄室を埋めていた石材を用いて新たに積み上げ、また玄室内部に向って傾いていた東壁南半部については石材を積み直すことによってほぼ垂直にするなど、側壁について若干の修復を加えた。4月26日、整備後公開を計画している玄室を除き、他を全て埋め戻して調査を終了した。

△東側壁の石を積み直す

### 3. 位置と環境

高井田山古墳は、高井田横穴群の史跡指定地内北東部に位置し、標高64.6mを測る。現在は古墳のすぐ北側にまで住宅地が迫っているが、本来は北から南へのびる細長い尾根の南端稜線上に位置し、北から南へ徐々に低くなってきた尾根頂部が、高井田山古墳の位置で再び高さを増し、その先端は急激に落ち込んでいる。現在は樹木が繁茂しているが、樹木がなければ、大和川を眼下に見下ろす絶好的立地である。

地質的には、高井田山古墳から北側は、花崗岩の風化土を地山とし、南側では、花崗岩層上に堆積した凝灰岩層を地山とする。この凝灰岩層が露頭する高井田山古墳の東側・南側には多数の横穴が掘削されており、高井田横穴群の第2支群を形成している。

第2支群から深い谷を挟んで東側には第1支群、同じく深い谷を挟んで西側には第3、4支群の横穴が分布しており、総数162基を数える。これらのうち、第2～4支群が、国史跡に指定され、史跡公園としての整備を実施している範囲に当たる。

高井田横穴群の北側、高井田川を挟んだ山地斜面には7～8世紀代の集落である高井田遺跡が位置するが、この高井田遺跡から北の安堂・太平寺にかけては、5世紀末葉から6世紀前葉にかけての木棺直葬を主体とする古墳が数十基存在したと考えられる。後世の削平を受けていたため、主体部・墳丘を確認できる例は少ないが、埴輪は相当広範囲から出土しており、当古墳と時期的に平行する点で注目される。



△高井田山古墳位置図  
(国土地理院発行1/25,000大和高田を使用)

また、古墳時代の集落としては、高井田山古墳の北1.5～2kmに位置する大県・大県南遺跡、あるいは北西2kmに位置する船橋遺跡をあげることができる。大県・大県南遺跡は、鍛冶專業集団の集落と想定されており、6世紀においては、おそらく全国最大の鍛冶工房が存在したと考えられる。また、船橋遺跡は学史的にも著名な大集落であり、国府の推定地にもあげられている。高井田山古墳の被葬者は、このどちらかの集落と深い関わりがあった人物ではないだろうか。

高井田横穴群の形成は6世紀中葉以降であり、高井田山古墳に後続する古墳は周辺には確認できない。また、先行する古墳もなく、単独墳であることにも注意したい。

#### 4. 墳丘

トレンチを丘陵の頂部（I）と、そこから放射状に5ヶ所（II～VI）、別に1ヶ所（VII）設定した。丘陵頂部は径約7mの平坦面であり、西側は東側に較べて著しく急斜面になっているため、西側道路の付設、その他によつて旧状が失なわれているものと判断された。

各トレンチの状況からみると、この丘陵では標高61～63mまで凝灰岩が堆積し、周囲の高井田横穴群と同じように現実に古墳の真下にも凝灰岩層を利用した横穴が築かれていた。この上に風化、砂質化した花崗岩塊を含む橙色土が堆積している（地山）。この橙色土は

標高64m付近ではほぼ平坦に整地され（Vトレンチ層序の写真）、ここに石室を収める墓塚が掘り込まれていた。墳丘には炭粒、小砾の多い土砂が盛土されていた。

墳丘の末端や築成の状況については全く確認できなかったため、墳形や規模については不明であるが、VIトレンチでは石室の中央部から約11m隔たった位置で傾斜が著しく平坦に変化していたことから、径約22mの円墳と推定した。ただ地形からみていくと北側に小さな造りだしをもつ可能性も考えられる。

玄室の崩落土から埴輪、須恵器、土師器、VIトレンチ北端の平坦部分で埴輪小片が検出されたが、他のトレンチからは何も出土しなかった。墳頂部における若干の埴輪の樹立や祭祀の存在などが推定される。



△調査前の墳丘（北から）



△Iトレンチ石室の検出状況（北から）



△Tトレンチ南端 墓道検出状況（南から）

△遠景（南西から  
手前は大和川）

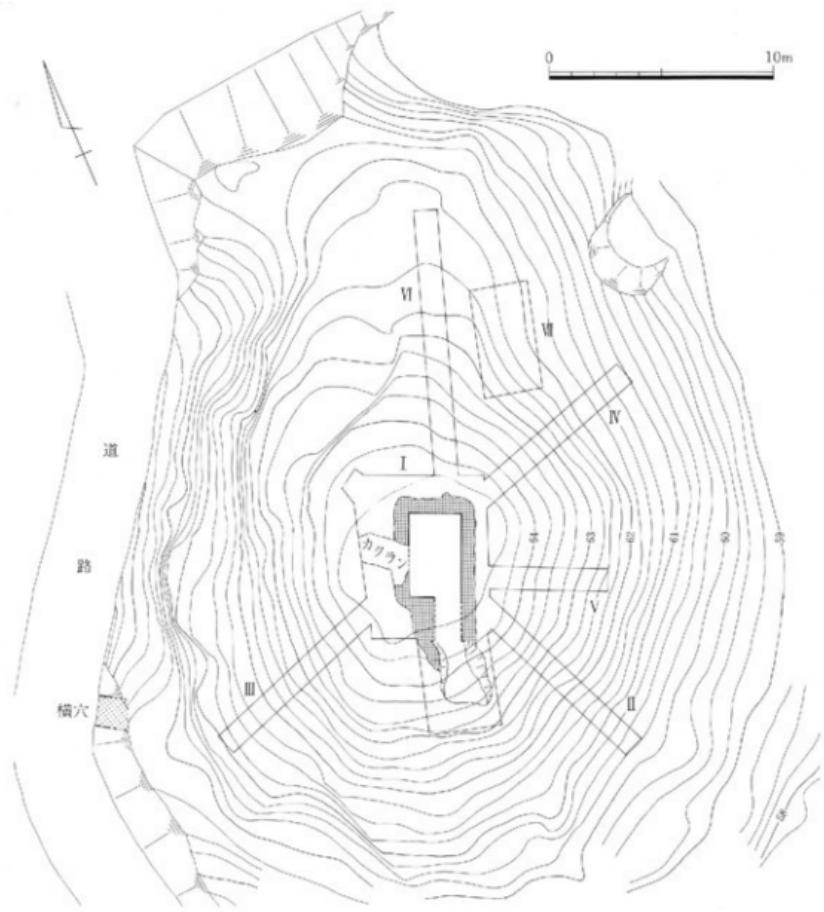


△遠景（北から  
遠くは二上山）



△墳丘（北西から）





△古墳測量図



△Vトレンチ（墓塚近くの層序）



△VIトレンチ（北から）

## 5. 横穴式石室

主体部は、偏平な板石を積み上げて築かれた右片袖式の横穴式石室であるが、調査前に天井はすべて崩落し、両側壁中央付近も玄室内に倒れ込んでいた。また、右側壁中央部は盜掘かと考えられる後世の擾乱によっても損なわれていた。

石室は、地山面を整地した後、 $5.4m \times 3.5m$  の墓壙を掘り込んで築かれている。玄室の長さは $3.73m$ 、幅は奥壁部分で $2.34m$ 、玄門部分で $2.26m$ 、羨道の長さは約 $2.0m$ 、幅は玄門部で $1.18m$ 、墓道の長さは約 $2.7m$  を測る。玄室主軸は、N— $23^\circ$ —Eである。

玄室平面形は、やや奥で広がるもの、ほぼ長方形となり、玄室の幅と長さの比は、およそ

よそ $1:1.6$ 、また袖部と羨道幅の比は、およそ $1:1$ となる。

奥壁の最も残存状態が良好な部分で現存高約 $1.3m$  を測る。玄室四隅はほぼ直角をなし、壁面も垂直に立ち上がるが、奥壁両隅の最上部では、角に三角形状に石材が積まれ、若干の持ち送りが確認できる。この状況から、床面から約 $1m$  の墓壙上面まで、石材10段前後を垂直に積み上げた後、石材を持ち送ってドーム状の天井を築いたものと考えられる。壁面を垂直に積み上げている部分では控積みは全く認められず、持ち送り部分には若干の控積みがなされていたようである。

天井石は3枚程度と推定され、その一石と考えられる大形の石材が、玄室内から出土している。



△横穴式石室全景（北から）



△閉塞状況

羨道は、閉塞石が良好な状態で残存しており、これを現状保存することにしたため、細部の構造は確認できない。現状から考えると、羨道の軸は玄室の軸よりやや左に振っているようである。

玄門部の天井石と考えられる石材が、ほぼ原位置を留めていると考えられる状況で検出され、閉塞石の状況から、羨道の天井石はこれ1石のみと考えられる。

玄室床面は、ほぼ平坦であるが、羨道端部では玄室床面より約15cm高くなっている。この間の床面の状況は、閉塞石によって確認できないが、おそらく緩やかに傾斜しているものと考えられる。また、玄室床面には一面に小礫が敷かれていたと推定されるが、この礫敷きは玄門部で途絶え、羨道部には続いていない。

石室石材は、割石も認められるが、大半が自然石である。奥田尚氏の鑑定によると、カンラン石輝石安山岩・輝石安山岩であり、一部を芝山から採取、他を大和川の河原から採取したものとされている。



△南西隅角部



△北西隅角部



△北東隅角部



△奥壁



△右侧壁



△左侧壁



約1/25

△前壁

## 6. 遺物の出土状況

玄室出土遺物の概略は以下のようである。

### 東 棺

銅鏡 1 熊斗 1 金製耳環 2 ガラス玉  
326 (5群) 不明銀製装具 4 鉄刀 1

### 西 棺

金製耳環 1 鉄刀片 1

### その他

〔武器〕 鉄槍 5 鉄矛 6 (片刃 4両刃 2)

鉄劍 1 石突 14 (大 4 小 10) 鉄鎌約

150 鉄刀片など

〔武具〕 胴 1 短甲 1 頸甲 1 肩甲 1組

草摺小札約 250

〔馬具〕 鞍具 1 鎧片 1

〔農工具〕 刀子 1 鉄鎌 1

〔その他〕 鉄製飾金具 金銅製不明品片

鉄釘・鏡 布 漆膜 棺材

〔土器〕 須恵器 (有蓋高杯 8組 無蓋高杯

3 壺 1) 土師器 (長頸壺 1)

### 崩落土

埴輪 須恵器 (器台 2 壺 2) 土師器  
(長頸壺 1)

副葬品の種類、数量は整理途中のものであり、  
搅乱、不明鉄製品の数も多い。

玄門に入った正面、東側壁に沿って長さ  
220cm、幅 58cm、高さ 60cm 程の東棺が復原できる。  
棺内では頭部と小口板の間に銅鏡、熊斗  
が置かれ、頭部の左右に一対の金製耳環、右  
腰に鉄刀、頸飾・手玉・足玉にあたる 5 群のガ  
ラス玉、足もとから不明銀製装具が出土した。

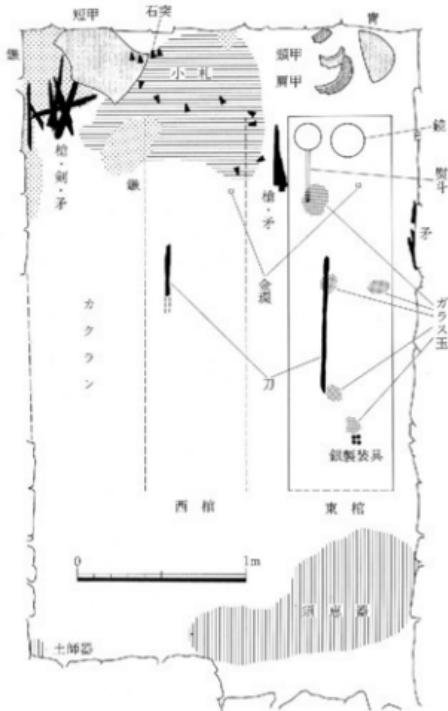
西棺は東棺に対応する位置に遺物が出土し  
たため図のように復原した。

武器は東・西棺の間、東・西側壁に沿って

置かれていた。槍・矛などの刺突具はいずれ  
も鋒を奥壁側に向けており、奥壁西隅ではこ  
れらは鐵鎌の上にのっている。ここでは連続  
した山形文の残る漆膜が検出されており、胡  
籠、柄などの皮革、木製品が想定される。

武具のうち胄は石に潰され、頂部を東に向  
けた横倒しの状態で出土した。短甲は奥壁に  
押しつけられたようにば倒立した状態で出  
土しており、草摺を含め棺の上に置かれてい  
たものが転落した可能性がある。

床面に敷かれた礫には朱の付着したものが  
みられる。棺材に朱が塗付されていたことを  
示すのであろう。



△遺物出土状況略図



△玄室北半部の出土状況（南から）



△鏡、熨斗、ガラス玉などの出土状況（南西から）



△東棺 鐵刀の出土状況（北から）



△冑、頸甲、肩甲の出土状況（南から）



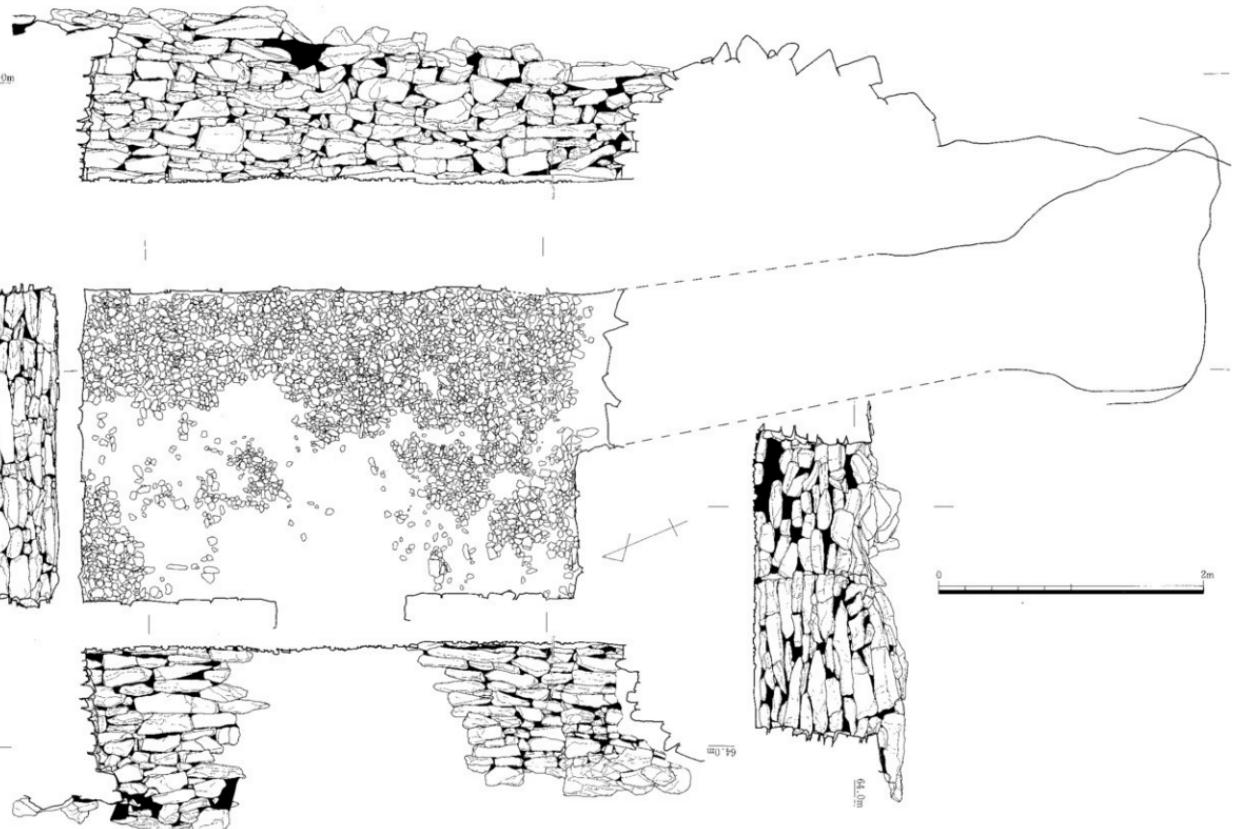
△短甲、鐵鎌、鐵槍などの出土状況（南から）



△草摺小札の出土状況（南から）



△須恵器の出土状況（西から）



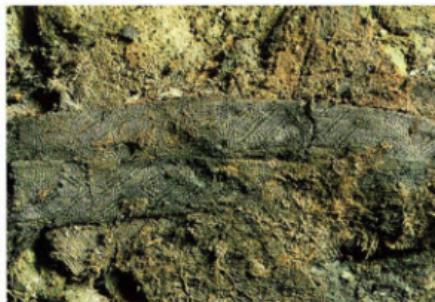
△横穴式石室実測図



△画像鏡



△神像（西王母）



△鏡背に付着していた綾

## 7. 遺 物

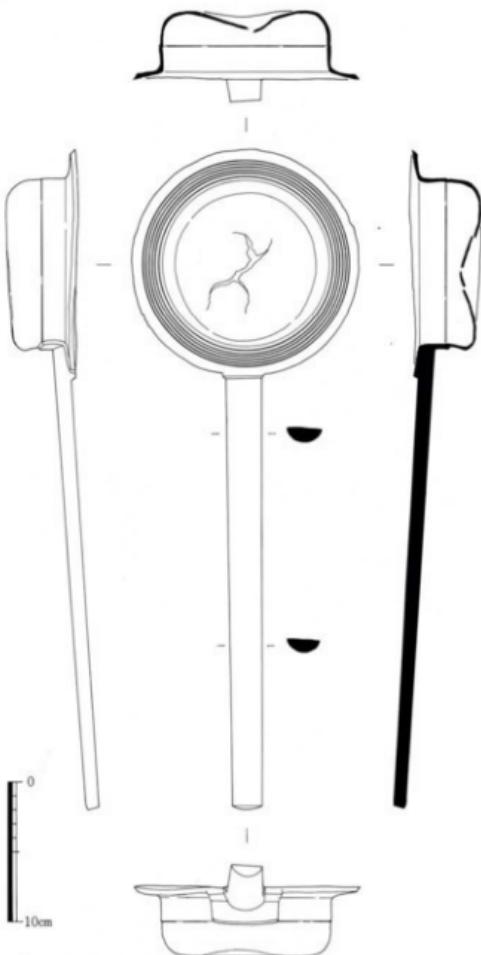
### 画像鏡（径20.6cm）

神人龍虎画像鏡とも呼ぶべきもので、乳で4分割された内区には仙人の侍す神像と龍・虎像とが一对で配されている。神像は銘文から東王父・西王母とみられ、X線写真から「王氏作竟佳且好 明而日月世之保服此竟者不知老 寿而東王公西王母山人子高赤松 長保二親宣子孫」の銘が読みとれる。鏡面を上向きにして置かれ、付着していた繊維からは麻、綾、錦などの布に包まれていたことがわかる。綾には連続した菱形文様をみるとができる。同じ大きさ、文様の鏡は京都市西京区鏡塚古墳、奈良県橿原町愛宕山古墳、岡山県長船町築山古墳、福岡県犀川町馬ヶ丘古墳から一面ずつ出土している。

## 熨斗

火熨斗（ひのし）形の青銅器。古代のアイロンともいわれるがその用途は明確ではない。遺骸頭部と棺小口板との空間に火皿を奥壁側にして置かれていた。出土時には柄の上に板がのっていたが、これは木箱等の部材ではなく棺材（側板）と判断した。

全長46.5cm、火皿口縁部径16.1cm・底部内径10cm・高さ4.9cm、重さ890g。柄の長さ30.4cm、幅2.5cm・2.2cm、断面形は下方に丸みをおびた半円形である。火皿口縁部は外方に大きく広がり、そこに6条の圏線がめぐる。また底部から高さ2.5cmの部位にわずかな段がある。柄は約3.5度の角度で斜上方に付き、火皿と一体で鋳造したものである。熨斗の柄、火皿口縁・内面には麻布、綿布などがみられ、また火皿にはS燃紐が残っているが、これが布に付属するものなのか、例えば手燭の灯芯のように熨斗の用途に関わるものなのか明確ではない。朝鮮半島や中国に較べ日本では古墳時代の出土例が少なく、完形では奈良県橿原市新沢千塚126号墳例、断片では福岡県吉井町塚堂古墳例が知られるのみである。



△熨斗実測図



△熨斗



△火皿内の燃紐



△衝角付冑



△顎甲、肩甲



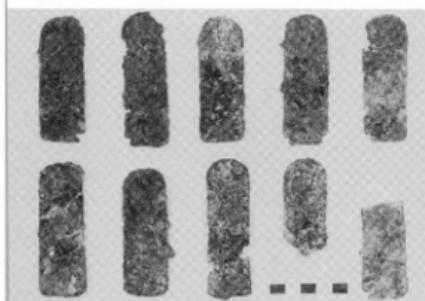
△短甲

### 甲 胴

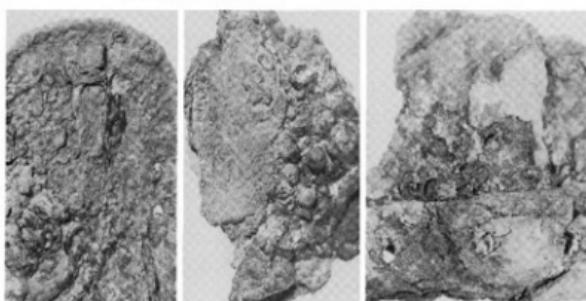
冑は横矧板鉄留式衝角付冑。半円形に曲げた帶金を鍛した鎧が付属する。また衝角部の前部から頂部に接し木芯に綿布を巻いたものが出土しているが、冑の部品か否か不明である。甲は横矧板鉄留式短甲。多くの部分が失われているが、引合板の断片などから右前胸開閉式とみられる。革包覆輪をもち、顎甲、半円形の帶金を鍛した肩甲が付属する。小札が約250枚あり草摺とみられる。縦断面形から平板と屈曲をもつものがある。いずれも幅3cm前後であるが、前者には長さ8.1~8.8cmのものがあり、後者は9.1cmとやや長い。下縁は革帶で包んで革紐で縫られ、横に連接されている。



△木芯布巻不明品



△草摺小札



△小札革紐

△小札革紐

△下縁の革帶



△西棺の鐵刀



△柄



△柄



△柄



△柄

## 武 器

武器には鐵刀、鐵劍、鐵槍、鐵矛、鐵鎌などがある。断片となっているものも多く、盗掘場などからも出土しているため、全体的な数量を数えることは難しい。

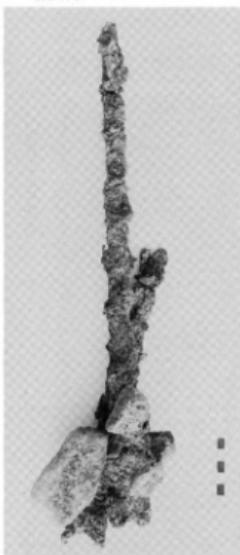
東・西棺にはそれぞれ一本の鐵刀が副葬され、東棺のものは長さ約79cmである。

鐵劍は完形品が1点ある。長さ約37cmと短かい。木で括えた柄には糸を密接して巻きつけ、さらにその上にやや太い糸を斜格子状に粗く巻いている。

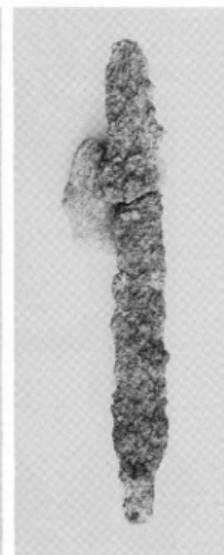
鐵槍は5点を数えることができる。基の基



△鐵刀片



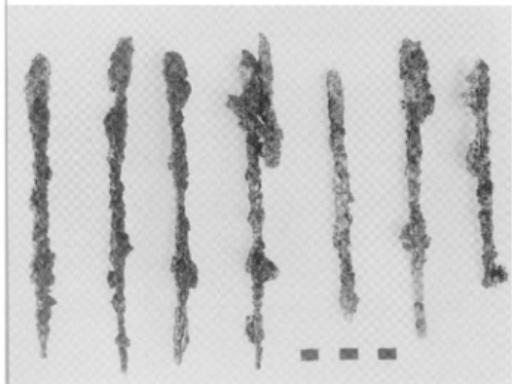
△鐵矛



△鐵槍



△鐵製石突



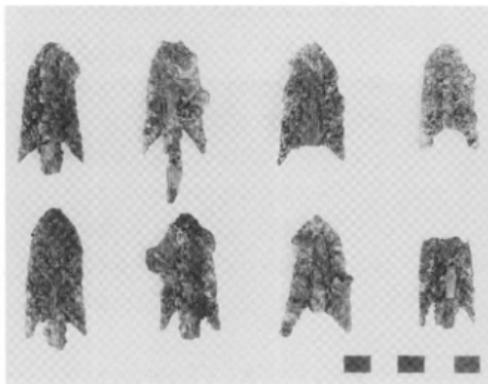
△錆着した長頸鎌

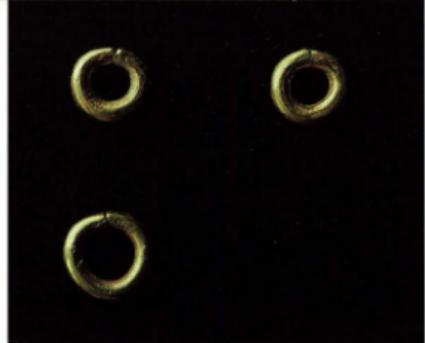
端部から鋒まで長さ約32cm、約41cm、さらに長いものなどがある。明瞭な間ではなく、木質の痕跡から柄縁は槍身の両面に舌状に突出したものであることがわかる。

鉄矛は6点ある。矛身には刀身形（片刃）と槍身形（両刃で棒状に近い）とがあり、前者の袋部は平縁、後者の袋部は三角形に切り込んだものである。前頁写真の鉄矛は槍身形であり、長さは約44cmである。

鉄槍・矛の付属具として鉄製石突が14点あるが、大・小があり、また身部と対応する位置からは出土していない。

鉄鎌のほとんどは長頸鎌であり、鎌身、間、逆刺などに種々のものがみられる。長さは約17.5cmあり、茎には矢柄も良く残っている。他に10点程の無茎・短茎鎌がある。深い逆刺をもち、鎌身中央部に円孔の穿たれたものもある。玄室西北隅部では、出土状況からみて鉄鎌に5群のまとまり（長頸鎌群4、無茎・短頸鎌群1）があるが、単純に計算すれば一群は20~25本の鉄鎌で構成されている。





△金製耳環（上は東棺）



△ガラス玉（頭飾）



△ガラス玉（手玉）



△ガラス玉（足玉）

#### 金製耳環

東棺のものは重量4.3gと4.4g。対になるものだろう。西棺のものはやや大きく重量5.3g。いずれも金の丸棒を曲げたものである。

#### ガラス玉

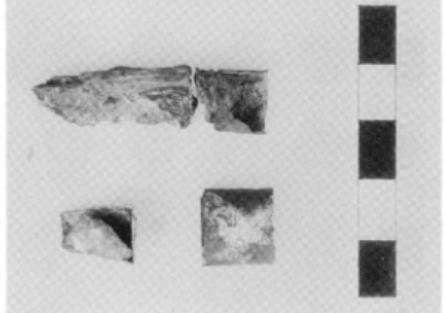
頭飾と思われる1群は駕斗の柄の位置に折り重ねて置かれ、遺骸の胸元に垂下されていたものではない。厚さ1.4cmの金色のもの1個、厚さ1.5cmの淡緑色のもの2個の他は、厚さ1cm程の濃紺色の丸玉である。手玉には頭飾と同じ丸玉が20個程使われている。足玉には厚さ0.5cm程の濃紺色の白玉が55個程使われている。



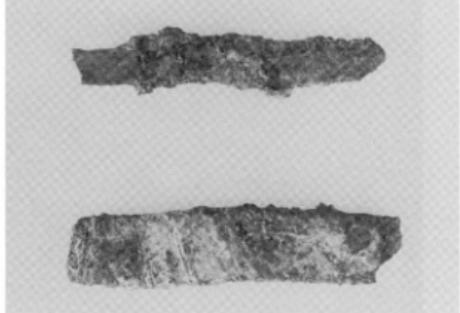
△漆膜

#### 漆膜

玄室西北隅、短甲や武器の出土した場所で検出された。鋭角的な山形文が連続し、専々に糸の通るような微小な円孔がみられる。



△銀製装具



△刀子（上）、鎌

### 農工具

写真の刀子は身の長さ6.85cm。棟間があり、基には木質が残る。鉄鎌は先端部を欠くが、もと部をわずかに折り曲げた、やや内反りのものである。

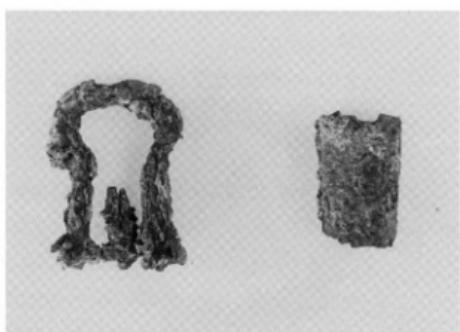
### 馬 具

馬具とみられる鉄製の釘具（帶金具）が1点ある。長さ6.8cm、幅1.5cm。刺金の先端部を欠く。木芯板張輪轆は吊り手の一部である。断面長方形の木質に鉄板をはり、一端には踏込部に連接する断面方形の木芯に鉄板をはった2本の棒状部がみえる。釘が正面から左・右に2本、側面から1本うたれている。

### その他

鉄製棺釘はいずれも折曲頭。写真は東棺のもので、左端は長さ18cmある。木質の残り方には3通りあり、ここから最大10cm厚の板材が復原できる。鎌には完形品がなく、いずれも断面長方形。右端は長さ8.6cm。

上の写真は東棺の副葬品で、南小口部近くから出土した。銀製で断面形は卵形。筒状のものと一端に底面のつくものとがある。木質の付着した鉄片が差し込まれているものもあり、兜金・口金具・鎌のような刀子の装具であろうか。



△釘具（左）、鎌片



△棺釘



## 布

熨斗、銅鏡には布の断片が付着している。熨斗の柄の表面には麻布の痕跡が明瞭であり、裏面にもわずかに及んでいる。ただ、ここには他の繊維も残り、また火皿には絹も残っているため、少なくとも2種類以上の布に包まれていたものと考えられる。こうした状況については銅鏡についても同様である。表を向いていた鏡面の布は腐蝕が進んでいたが、それでも麻布、絹布（錦、綾）が折り重なった状態で残っていた。鏡背側での布の遺存状況は比較的良好で、このうち綾は経3枚綾という方法で織られ（角山幸洋）、連続菱形文をみることができる。



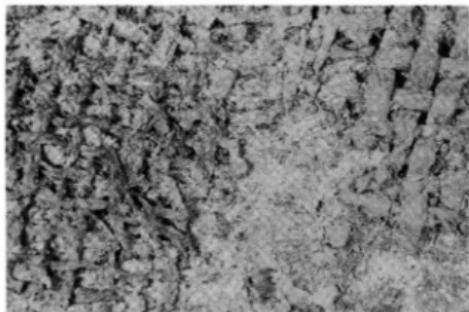
△熨斗 鏡面の麻布

2mm



△銅鏡 鏡面の綾

2mm



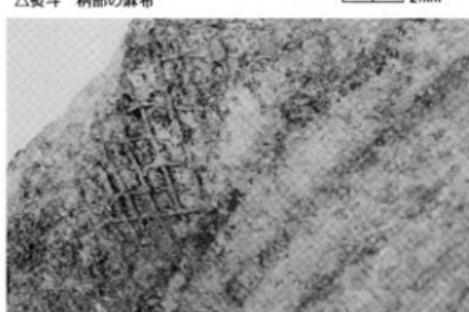
△熨斗 柄部の麻布

2mm



△銅鏡 鏡面の綾

2mm



△熨斗 火皿口縁部の絹布

2mm



△銅鏡 鏡面の絹布

2mm

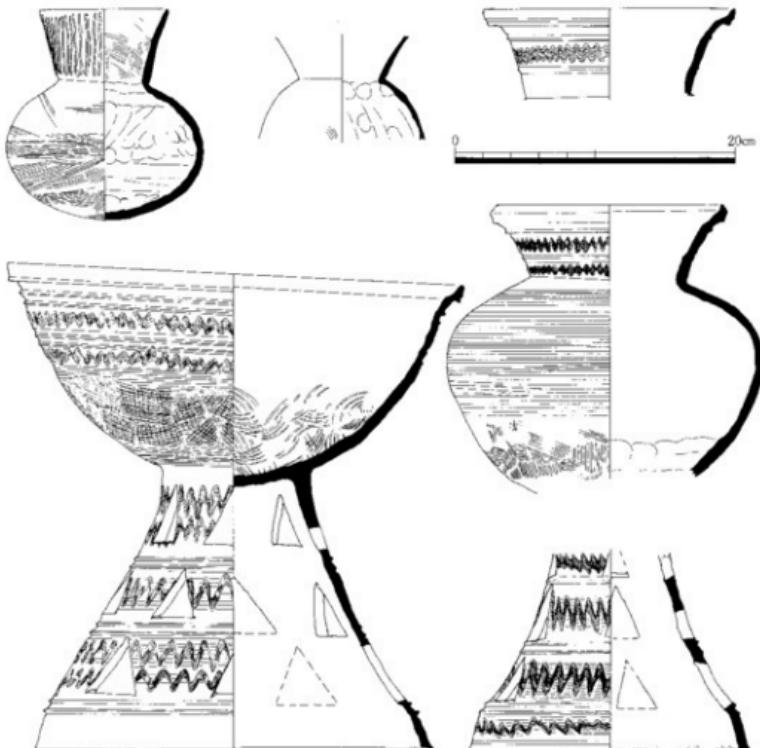
## 土 器

土器は、石室内に崩落していた土砂や石材に混じって、土師器の長頸壺2点、須恵器の壺2点、器台2点分が出土している。壺と器台は2セットが墳丘上に置かれていたと推定され、完形の土師器長頸壺は玄室南西隅の床面よりやや上層で出土している。

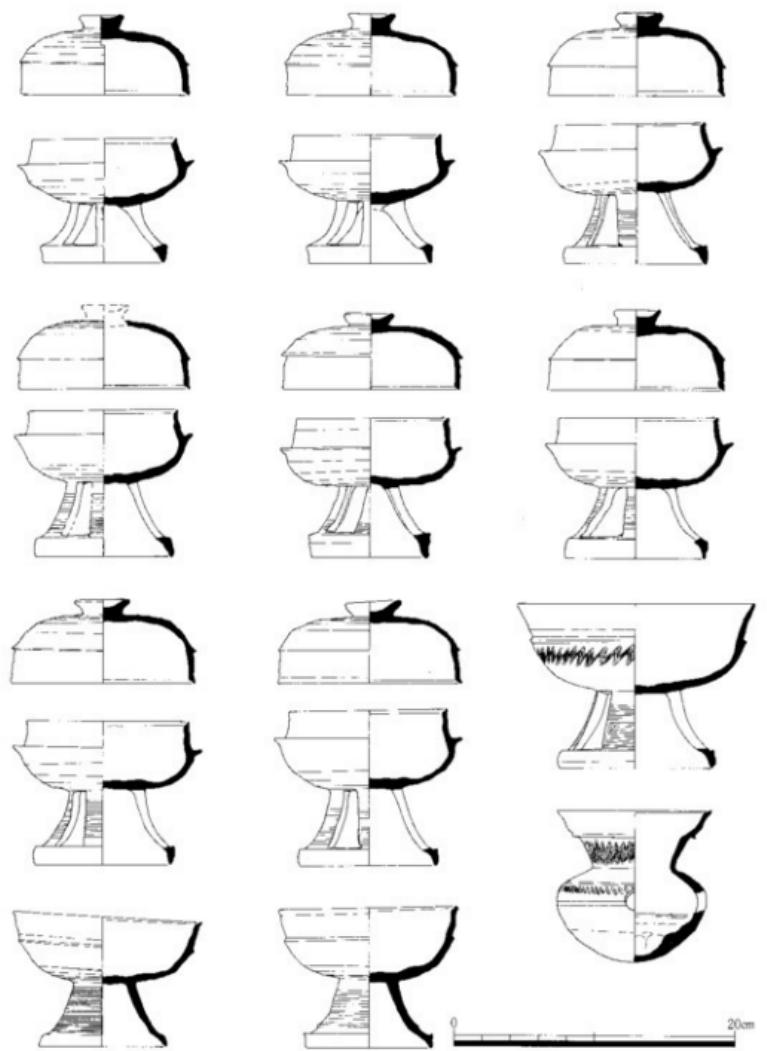
玄室床面出土の須恵器は、玄門付近に集中し、ほぼ原位置を留めていると考えられる。有蓋高杯8セット、無蓋高杯3点、壺1点が出土しており、蓋杯は全く出土していない。

有蓋高杯は、蓋の稜線が鋭く、杯部の立ち上がりが非常に高いものである。脚部の透し窓は、すべて三方である。無蓋高杯は2種に分けられ、大形の1点は杯部外面に波状文を有し、脚部は三方に透し窓を有する。小形の2点は透し窓がなく、淡灰白色を呈し、軟質、焼き歪みがみられる。底は頸部外面に波状文、体部に刺突文を施している。

これらの須恵器は、陶邑TK23、もしくはTK47型式と考えられ、5世紀末葉頃に位置づけられるであろう。



△石室内崩落土出土土器



△石室床面出土土器



△有蓋高杯



△埴輪



△器台

### 埴輪

埴輪は、すべて小片であり、石室内崩落土中からその大半が出土している。蓋形埴輪の立飾り部分の小片1点を除き、他はすべて円筒、もしくは朝顔形埴輪である。

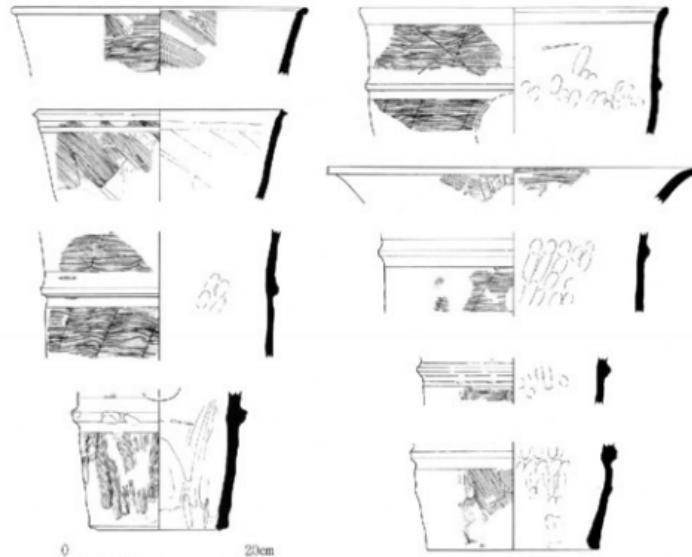
口縁部は、緩やかに外反し、端部を丸くおさめるものと、体部から直線的にのび、端部が面をなすものがみられる。凸帯は、偏平な台形断面を呈するものが大半を占め、三角形状の断面を呈するものもみられる。

外面調整は、タテハケ後に継続するヨコハケ（B種ヨコハケ）が施されるものが多く、1次調整のタテハケのみを施すものもみられる。ヨコハケは静止痕は左下がりとなる。

内面調整は、ユビナデ、ユビオサエを基本とし、口縁部にはハケメもみられる。

透孔は円形に限られる。

出土状況や、量が少ないとから考えると、埴頂に十数本が樹立されていただけではないかと考えられる。



△石室内崩落土出土埴輪

## 8. まとめ

高井田山古墳の発掘調査では、畿内でも最古級の横穴式石室を主体部とする古墳として、6世紀以降畿内を中心にして爆発的に増加する畿内型横穴式石室出現の様相を探るために貴重な資料を得ることができた。

現在日本における横穴式石室の出現は、朝鮮半島諸国との密接な交流をもった4世紀末葉の北部九州地域に求められている。そして地域的、階層的変容を遂げながら5世紀中葉には、竪穴系横口式石室あるいは肥後型石室と呼ばれる北部九州地域の横穴式石室が、畿内とその周辺地域で一部に採用されるようになったと認識されている。

ところで高井田山古墳は、平面形の長幅比が1.6:1の右片袖式横穴式石室で、玄室の四隅は直角、周壁は残存する高さ約1.3mの高さまで板石を垂直に積み上げ、玄室に向ってわずかに降る羨道、墓道をもち、砾塊を積んで閉塞したもので、須恵器から5世紀末葉の年代が与えられる。さらに天井は高さ2m以上で持ち送りの急なドーム状、羨道は高さ1.1m前後で天井石は1枚と推定される。これを周辺の古墳と比較すれば、古市古墳群中の5世紀中葉とされる藤井寺市・藤の森古墳から高井田山古墳へ、さらに6世紀初頭に位置づけられる大阪市・七ノ坪古墳へと、畿内の初期横穴式石室には右片袖式が多いという設定内で、横穴式石室導入の契機と玄室面積拡張の方向性とを推測することもできる。

しかし、翻って石室は立体的な構築物という視点からみれば、高井田山古墳と藤の森古墳との間には、玄室前壁などの在り方に大きな違いがあり、また同時期の北部九州の横穴式石室とも様相を異にしている。そうした意味では高井田山古墳の横穴式石室の系譜を直接朝鮮半島、特に横穴式石室の発達した5世紀の百濟地域と畿内との緊密な交流の中に求めることが全く不可能なことではない。

いうまでもなく竪穴式石室を伝統的葬法とした畿内では、横穴式石室や須恵器副葬に代表される新來の葬法、儀礼を導入するうえで、背後に複雑な社会関係と歴史的過程とが存在したであろう。したがって高井田山古墳の理解を進めるためには、単に横穴式石室の構造や年代的考察だけではなく、船載とみられる熨斗などの青銅器や技術的に最新のセット関係をもつ甲冑をはじめとする武器・武具などの副葬品、古市古墳群周辺部に位置し他に連続して築かれた古墳がみられないという立地、周辺の先行・後続する集落遺跡の性格などを総合的に判断していくことが必要であり、整理を進めるうえでの今後の課題としたい。

雨中の現地説明会▷



熨斗、銅鏡の出土状況▷

TAKAIDAYAMA TUMULUS



高井田山古墳

---

1992年3月31日発行

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1-43

TEL 0729(72)1501 内5133

印 刷 株中島弘文堂印刷所

---